

SPARC T5-4

プロダクトノート

Copyright © 2013 , Oracle and/or its affiliates. All rights reserved.

このソフトウェアおよび関連ドキュメントの使用と開示は、ライセンス契約の制約条件に従うものとし、知的財産に関する法律により保護されています。ライセンス契約で明示的に許諾されている場合もしくは法律によって認められている場合を除き、形式、手段に関係なく、いかなる部分も使用、複写、複製、翻訳、放送、修正、ライセンス供与、送信、配布、発表、実行、公開または表示することはできません。このソフトウェアのリバース・エンジニアリング、逆アセンブル、逆コンパイルは互換性のために法律によって規定されている場合を除き、禁止されています。

ここに記載された情報は予告なしに変更される場合があります。また、誤りが無いことの保証はいたしかねます。誤りを見つけた場合は、オラクル社までご連絡ください。

このソフトウェアまたは関連ドキュメントを、米国政府機関もしくは米国政府機関に代わってこのソフトウェアまたは関連ドキュメントをライセンスされた者に提供する場合は、次の通知が適用されます。

U.S. GOVERNMENT END USERS:

Oracle programs, including any operating system, integrated software, any programs installed on the hardware, and/or documentation, delivered to U.S. Government end users are "commercial computer software" pursuant to the applicable Federal Acquisition Regulation and agency-specific supplemental regulations. As such, use, duplication, disclosure, modification, and adaptation of the programs, including any operating system, integrated software, any programs installed on the hardware, and/or documentation, shall be subject to license terms and license restrictions applicable to the programs. No other rights are granted to the U.S. Government.

このソフトウェアもしくはハードウェアは様々な情報管理アプリケーションでの一般的な使用のために開発されたものです。このソフトウェアもしくはハードウェアは、危険が伴うアプリケーション(人的傷害を発生させる可能性があるアプリケーションを含む)への用途を目的として開発されていません。このソフトウェアもしくはハードウェアを危険が伴うアプリケーションで使用する場合、安全に使用するために、適切な安全装置、バックアップ、冗長性(redundancy)、その他の対策を講じることは使用者の責任となります。このソフトウェアもしくはハードウェアを危険が伴うアプリケーションで使用したことにより起因して損害が発生しても、オラクル社およびその関連会社は一切の責任を負いかねます。

OracleおよびJavaはOracle Corporationおよびその関連企業の登録商標です。その他の名称は、それぞれの所有者の商標または登録商標です。

Intel, Intel Xeonは、Intel Corporationの商標または登録商標です。すべてのSPARCの商標はライセンスをもとに使用し、SPARC International, Inc.の商標または登録商標です。AMD, Opteron, AMDロゴ、AMD Opteronロゴは、Advanced Micro Devices, Inc.の商標または登録商標です。UNIXは、The Open Groupの登録商標です。

このソフトウェアまたはハードウェア、そしてドキュメントは、第三者のコンテンツ、製品、サービスへのアクセス、あるいはそれらに関する情報を提供することがあります。オラクル社およびその関連会社は、第三者のコンテンツ、製品、サービスに関して一切の責任を負わず、いかなる保証もいたしません。オラクル社およびその関連会社は、第三者のコンテンツ、製品、サービスへのアクセスまたは使用によって損失、費用、あるいは損害が発生しても一切の責任を負いかねます。

目次

1. このドキュメントの使用方法	5
関連ドキュメント	5
フィードバック	5
Oracle サポートへのアクセス	5
2. 最新情報	7
プリインストールされているソフトウェア	7
サポートされている最小バージョンのファームウェア、OS、およびソフトウェア	8
Oracle Solaris 11 OS の必須のパッケージ更新	8
Oracle Solaris 10 OS の必須パッチ	9
Oracle Solaris 10 1/13 の必須パッチ	9
Oracle Solaris 10 8/11 の必須パッチ	9
Oracle Solaris 10 9/10 の必須パッチ	10
パッチを取得する	10
既知の問題	11
プロセッサモジュールのベゼルのラベルが正しくない	12
sas2ircu が RAID ボリュームの作成に失敗することがある (BugID 15788910)	12
rKVMS では SPARC クライアントからのストレージのリダイレクトがサポートされていない (BugID 15795058)	14
マウスポインタがリモートウィンドウのカーソルに同調していない (BugID 15798251)	14
警告メッセージが障害の発生した USB 接続を正しく示していない (BugID 15799824)	16
kmdb が failed to allocate XXX bytes を報告することがある (BugID 15806455)	16
USB ポートでブート中に xhci デバイスが失敗する (BugID 15809582)	17
/System/Cooling のターゲットに電源装置ファンが未サポートとして表示される (BugID 15809846)	17
libldom/ldom_xmpp_client.c 内でファイル記述子が漏えいしている (BugID 15811297)	17
ilomconfig が Internal Error を報告することがある (BugID 15823485)	18
fault.sunos.eft.unexpected_telemetry 障害が断続的に発生する (BugID 15820471)	18
高速の PCIe I/O カードがときどき Gen1 I/O の速度まで低下する (BugID 15825866)	20
アクティブな mempm はノード全体にわたってケージ割り当てのバランスを取るべきである (Bug ID15944881)	21
HC からの再構成呼び出しのあとに POST が機能しない (BugID 15968276)	22

Link error on port 3 警告 (BugID 16038894)	23
ドライブを構成解除したときに、ドライブの取り外し OK LED が点灯しないこと がある (BugID 16051551)	23
FPGA iPOST の power-on-reset、error-reset、および hw-change トリ ガーが機能しない (BugID 16192025)	25
複数の LDOM 構成ファイルが同じ名前を使って存在する場合に Oracle ILOM エラーが発生することがある (BugID 16239544)	27
CPU の電力管理によってディスクの IOPS パフォーマンスが低下する可能性 がある (BugID 16355418)	27
SR-IOV デバイスの使用中に、リソースのバインド解除または削除の試みがハン グアップし、Ctrl-C キーで停止できない (BugID 16426940)	27
Oracle ILOM が V1 権限を送信するが、Oracle Solaris が V1 権限を処理 できない (BugID 16456603)	27
SP の管理で予想どおりにテーブルが表示されない (BugID 16607793)	28
初回ブート中の一部のインスタンスで、Oracle Solaris OS のドライバによるド ライブコントローラへの接続の試みが早すぎたためにドライブ接続エラーが発生 する (Bug ID16608475)	29
ドキュメントに関する問題点	30
プロセッサモジュールのベゼルの図が正しくない	31
プロセッサモジュールの保守ラベルに正しくない DIMM 構成が示されてい る	31
プロセッサモジュールの保守ラベルに正しくないプロセッサモジュール構成が示 されている	31
プロセッサモジュールの保守ラベルにフィルターパネルのサポートが示されてい る	31

1

・・・ 第 1 章

このドキュメントの使用方法

このドキュメントには、Oracle の SPARC T5-4 サーバーに関する最新情報が記載されています。このドキュメントは、Oracle の SPARC T5-4 サーバーの設置、構成、保守、およびサービスのトレーニングを受けた熟練したシステムエンジニアを対象としています。このドキュメントに記載されている情報を利用するには、高度なサーバー技術を扱った経験を持っている必要があります。

- [5 ページの「関連ドキュメント」](#)
- [5 ページの「フィードバック」](#)
- [5 ページの「Oracle サポートへのアクセス」](#)

関連ドキュメント

ドキュメント	リンク
すべての Oracle 製品	http://docs.oracle.com
SPARC T5-4	http://www.oracle.com/goto/T5-4/docs
Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM)	http://www.oracle.com/goto/ILOM/docs
Oracle Solaris 11 OS	http://www.oracle.com/goto/Solaris11/docs
Oracle Solaris 10 OS	http://www.oracle.com/goto/Solaris10/docs
Oracle VM Server for SPARC	http://www.oracle.com/goto/VM-SPARC/docs
Oracle VTS	http://www.oracle.com/goto/VTS/docs

フィードバック

このドキュメントについてのフィードバックは次からお寄せください。

<http://www.oracle.com/goto/docfeedback>

Oracle サポートへのアクセス

Oracle のお客様は、My Oracle Support を通して電子サポートにアクセスできます。詳細は、<http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=acc&id=info> を参照してください。聴覚に障害をお持ちの場合は、<http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=acc&id=trs> を参照してください。

最新情報

これらのトピックには、サーバーに関する重要な情報および最新のニュースが記載されています。

- ・ [7 ページの「プリインストールされているソフトウェア」](#)
- ・ [8 ページの「サポートされている最小バージョンのファームウェア、OS、およびソフトウェア」](#)
- ・ [8 ページの「Oracle Solaris 11 OS の必須のパッケージ更新」](#)
- ・ [9 ページの「Oracle Solaris 10 OS の必須パッチ」](#)
- ・ [11 ページの「既知の問題」](#)
- ・ [30 ページの「ドキュメントに関する問題点」](#)

プリインストールされているソフトウェア

ソフトウェア	場所	説明
Oracle Solaris 11.1 OS	OS はドライブ 0 にインストールされています (ZFS ファイルシステムを使用)。	ホスト OS。
Oracle VM Server for SPARC ¹	<code>/opt/SUNWldm</code>	論理ドメインを管理します。
Electronic Prognostics [*]	<code>/usr/lib/ep</code>	特定の FRU 障害の可能性について早期の警告を提供します。
Oracle VTS [*]	<code>/usr/sunvts</code>	ハードウェアの検証テストを提供します。

¹これらのソフトウェアコンポーネントは Oracle Solaris 11 OS ディストリビューションの一部です。

プリインストールされている OS は、サーバーにはじめて電源を投入したあと、適切な時点で構成することができます。

必須のパッケージ更新はプリインストールされていない可能性があります。サーバーを本稼働環境に移す前に、必ず必須の更新をすべて取得してインストールしてください。[8 ページの「Oracle Solaris 11 OS の必須のパッケージ更新」](#)を参照してください。

Oracle Solaris OS のインストールおよび構成の手順については Oracle Solaris のドキュメントを参照してください。

プリインストールされている OS を使用する代わりに、その OS を必須のパッケージ更新またはパッチとともに再インストールできます。[8 ページの「サポートされている最小バージョンのファームウェア、OS、およびソフトウェア」](#)を参照してください。

サポートされている最小バージョンのファームウェア、OS、およびソフトウェア

Oracle VM Server for SPARC をサーバーに構成する場合は、その OS の最小 (またはそれ以降) のバージョンをさまざまに組み合わせてインストールできます。たとえば、SRU 3.5.1 を含む Oracle Solaris 11.1 を制御ドメインに使用し、Oracle Solaris 10 9/10 をゲストドメインに使用できます。

ソフトウェア	サポートされている最小バージョン
Sun システムファームウェア	9.0.0 は Oracle ILOM 3.2.1 を含みます
Oracle Solaris 11 OS	制御ドメイン、ゲストドメイン、および非仮想化構成の場合: Oracle Solaris 11.1 SRU 4.6 これらのソフトウェアコンポーネントを含みます。 <ul style="list-style-type: none">• Oracle VM Server for SPARC 3.0.0.1• Oracle Electronic Prognostics• Oracle VTS 7.0 PS 15 8 ページの「Oracle Solaris 11 OS の必須のパッケージ更新」 も参照してください。
Oracle Solaris 10 OS	• 制御ドメイン、ゲストドメイン、または非仮想化構成の場合: Oracle Solaris 10 1/13 • ゲストドメインの場合のみ: Oracle Solaris 10 9/10 OS または Oracle Solaris 10 8/11 OS に Oracle Solaris 10 1/13 SPARC バンドルおよびパッチを追加。 Oracle Solaris 10 OS には Oracle VTS 7 PS15 が含まれています これらのソフトウェアコンポーネントをインストールできます。 <ul style="list-style-type: none">• Oracle VM Server for SPARC 3.0.0.1• Oracle Electronic Prognostics 1.3 9 ページの「Oracle Solaris 10 OS の必須パッチ」 も参照してください。

Oracle Solaris 11 OS の必須のパッケージ更新

現時点で、プリインストールされている Oracle Solaris 11.1 OS をこのサーバーで使用するために必要なパッケージ更新はありません。

OS を再インストールする場合は、サーバーやオプションのハードウェアまたはソフトウェアコンポーネントを本稼働環境に移す前に特定のパッケージ更新のインストールが必要になることがあります。サーバーには、少なくとも Oracle Solaris 11.1 SRU 4.6 が必要です。

最新の Oracle Solaris 11.1 SRU (Support Repository Update) をインストールしてください。このアクションを取ることで、確実に最新のソフトウェアがサーバーに組み込まれ、最良のパフォーマンス、セキュリティ、および安定性を得ることができます。

サーバーに現在インストールされている SRU を表示するには、**pkg info entire** コマンドを使用します。

pkg コマンドまたはパッケージマネージャーの GUI を使用して、<https://pkg.oracle.com/solaris/support> から使用可能な SRU をダウンロードします。



注記

Oracle Solaris 11 のパッケージ更新リポジトリにアクセスするには、必須の SSL 証明書およびサポートキーのインストールを可能にする Oracle サポート契約を結ぶ必要があります。<http://www.oracle.com/technetwork/articles/servers-storage-admin/o11-018-howto-update-s11-1572261.html> にある記事を参照してください。Oracle の証明書リクエストの Web サイト (<https://pkg-register.oracle.com>) に移動してください。

Oracle Solaris 10 OS の必須パッチ

Oracle Solaris 10 OS のインストールを選択した場合は、追加のパッチ (および場合によってはパッチバンドル) もインストールする必要があります。

- [9 ページの「Oracle Solaris 10 1/13 の必須パッチ」](#)
- [9 ページの「Oracle Solaris 10 8/11 の必須パッチ」](#)
- [10 ページの「Oracle Solaris 10 9/10 の必須パッチ」](#)
- [10 ページの「パッチを取得する」](#)

Oracle Solaris 10 1/13 の必須パッチ

このバージョンの OS は、制御ドメイン、ゲストドメイン、または非仮想化構成でサポートされていません。

インストール順序	OS またはパッチ
1	Oracle Solaris 10 1/13 OS
2	必須パッチ: <ul style="list-style-type: none"> • 148322-07 (またはそれ以降) • 148324-06 (またはそれ以降) • 148888-01 (またはそれ以降) • 149638-01 (またはそれ以降) • 149644-01 (またはそれ以降) • 150011-02 (またはそれ以降) • 150025-01 (またはそれ以降) • 150027-01 (またはそれ以降) • 150107-01 (またはそれ以降)

Oracle Solaris 10 8/11 の必須パッチ

このバージョンの OS は、ゲストドメインでのみサポートされています。

インストール順序	OS またはパッチ
1	Oracle Solaris 10 8/11 OS
2	Oracle Solaris 10 1/13 SPARC バンドル
3	Oracle Solaris 10 1/13 のすべての必須パッチ。 9 ページの「Oracle Solaris 10 1/13 の必須パッチ」 を参照してください。

**注記**

Oracle Solaris 10 1/13 SPARC バンドルをインストールするまで、Oracle Solaris 10 8/11 OS では 512 の CPU および 3840G バイトのメモリしかサポートしません。それらのリソースを超えるサーバーでは、Oracle Solaris 10 1/13 SPARC バンドルをインストールするまでリソースを減らすか、より新しいバージョンの Oracle Solaris OS をインストールしてください。

**注記**

Oracle Solaris 10 1/13 SPARC バンドルをインストールするまで、バグ 15712380、15704520、および 15665037 が発生する可能性があります。最初の 2 つのバグは、Oracle Solaris 10 1/13 SPARC バンドルをインストールすると解決されます。これらのバグは、パッチのインストールに影響しません。

Oracle Solaris 10 9/10 の必須パッチ

この OS は、ゲストドメインでのみサポートされています。

インストール順序	OS またはパッチ
1	Oracle Solaris 10 9/10 OS
2	Oracle Solaris 10 1/13 SPARC バンドル
3	Oracle Solaris 10 1/13 のすべての必須パッチ。 9 ページの「Oracle Solaris 10 1/13 の必須パッチ」 を参照してください。

**注記**

Oracle Solaris 10 1/13 SPARC バンドルをインストールするまで、Oracle Solaris 10 9/10 OS では 512 の CPU および 3840G バイトのメモリしかサポートしません。それらのリソースを超えるサーバーでは、Oracle Solaris 10 1/13 SPARC バンドルをインストールするまでリソースを減らすか、より新しいバージョンの Oracle Solaris OS をインストールしてください。

**注記**

Oracle Solaris 10 1/13 SPARC バンドルをインストールするまで、バグ 15712380、15704520、および 15665037 が発生する可能性があります。最初の 2 つのバグは、Oracle Solaris 10 1/13 SPARC バンドルをインストールすると解決されます。これらのバグは、パッチのインストールに影響しません。

パッチを取得する

Oracle Solaris 10 OS のパッチを取得するには、これらの手順を実行します。

1. My Oracle Support にサインインします。

- <http://support.oracle.com>
2. 「パッチと更新版」タブを選択します。
 3. 「パッチ検索」パネルを使用してパッチを検索します。
「パッチ名または番号」フィールドを使用して検索する場合は、パッチの完全な名前または番号を指定する必要があります。例:
 - Solaris 10 1/13 SPARC Bundle
 - 13058415
 - 147159-03
 リビジョン番号 (最後の 2 桁) のないパッチ番号を使用して検索するには、リビジョン番号の代わりに **%** を入力します。例:
147159-%
 4. パッチが見つかったら、README にアクセスして、そのサイトからパッチをダウンロードします。
パッチの README には、パッチのインストール手順が記載されています。

既知の問題

これらのトピックでは、サーバーの既知の問題について説明します。

- 12 ページの「プロセッサモジュールのベゼルのラベルが正しくない」
- 12 ページの「**sas2ircu** が RAID ボリュームの作成に失敗することがある (BugID 15788910)」
- 14 ページの「rKVMs では SPARC クライアントからのストレージのリダイレクトがサポートされていない (BugID 15795058)」
- 14 ページの「マウスポインタがリモートウィンドウのカーソルに同調していない (BugID 15798251)」
- 16 ページの「警告メッセージが障害の発生した USB 接続を正しく示していない (BugID 15799824)」
- 16 ページの「**kmdb** が failed to allocate XXX bytes を報告することがある (BugID 15806455)」
- 17 ページの「USB ポートでブート中に **xhci** デバイスが失敗する (BugID 15809582)」
- 17 ページの「/System/Cooling のターゲットに電源装置ファンが未サポートとして表示される (BugID 15809846)」
- 17 ページの「libldom/ldom_xmpp_client.c 内でファイル記述子が漏えいしている (BugID 15811297)」
- 18 ページの「**ilomconfig** が **Internal Error** を報告することがある (BugID 15823485)」
- 18 ページの「fault.sunos.eft.unexpected_telemetry 障害が断続的に発生する (BugID 15820471)」
- 20 ページの「高速の PCIe I/O カードがときどき Gen1 I/O の速度まで低下する (BugID 15825866)」
- 21 ページの「アクティブな mempm はノード全体にわたってケージ割り当てのバランスを取るべきである (Bug ID15944881)」

- 22 ページの「HC からの再構成呼び出しのあとに POST が機能しない (BugID 15968276)」
- 23 ページの「**Link error on port 3** 警告 (BugID 16038894)」
- 23 ページの「ドライブを構成解除したときに、ドライブの取り外し OK LED が点灯しないことがある (BugID 16051551)」
- 25 ページの「FPGA iPOST の power-on-reset、error-reset、および hw-change トリガーが機能しない (BugID 16192025)」
- 27 ページの「複数の LDOM 構成ファイルが同じ名前を使って存在する場合に Oracle ILOM エラーが発生することがある (BugID 16239544)」
- 27 ページの「CPU の電力管理によってディスクの IOPS パフォーマンスが低下する可能性がある (BugID 16355418)」
- 27 ページの「SR-IOV デバイスの使用中に、リソースのバインド解除または削除の試みがハングアップし、Ctrl-C キーで停止できない (BugID 16426940)」
- 27 ページの「Oracle ILOM が V1 権限を送信するが、Oracle Solaris が V1 権限を処理できない (BugID 16456603)」
- 28 ページの「SP の管理で予想どおりにテーブルが表示されない (BugID 16607793)」
- 29 ページの「初回ブート中の一部のインスタンスで、Oracle Solaris OS のドライバによるドライブコントローラへの接続の試みが早すぎたためにドライブ接続エラーが発生する (BugID 16608475)」

プロセッサモジュールのベゼルのラベルが正しくない

一部のサーバーでは、プロセッサモジュールのラベルに、それらがホットサービス可能なコンポーネントであることが示されています。しかし、それらのプロセッサモジュールはコールドサービス可能なコンポーネントです。サーバーからプロセッサモジュールを取り外す前にサーバーの電源を切る必要があります。詳細は、『SPARC T5-4 サーバースerviceマニュアル』を参照してください。

sas2ircu が RAID ボリュームの作成に失敗することがある (BugID 15788910)

Oracle Solaris 内で **sas2ircu** コマンドを使用して RAID ボリュームを作成すると、ボリュームの作成に失敗したことがそのコマンドより報告されることがあります。例:

```
# ./sas2ircu 0 create raid0 max 1:0 1:1 1:2 my-RAID0
LSI Corporation SAS2 IR Configuration Utility.
Version 14.00.00.00 (2012.07.04)
Copyright (c) 2009-2012 LSI Corporation. All rights reserved.

You are about to create an IR volume.

WARNING: Proceeding with this operation may cause data loss or data
corruption. Are you sure you want to proceed (YES/NO)? yes

WARNING: This is your last chance to abort this operation. Do you wish
to abort (YES/NO)? no
Please wait, may take up to a minute...
@ Nov  6 09:46:47 sys-33 scsi: /pci@300/pci@1/pci@0/pci@2/scsi@0
(mpt_sas0):
Nov  6 09:46:47 sys-33          Volume 0 is now , enabled, inactive
@ Nov  6 09:47:45 sys-33 scsi: WARNING: /pci@300/pci@1/pci@0/pci@2/scsi@0
```

```
(mpt_sas0):
Nov  6 09:47:45 sys-33      passthrough command timeout
@ SAS2IRCU: IocStatus = 0 IocLogInfo = 0SAS2IRCU: Volume creation
  failed.
SAS2IRCU: Error executing command CREATE
#
```

Oracle Solaris プロンプトで **sas2ircu** コマンドを再入力すると、そのコマンドは失敗します。**sas2ircu** コマンドは、ディスクがすでにボリュームに格納されているため、間違った数のディスクが指定されたことを通知します。例:

```
# ./sas2ircu 0 create raid0 max 1:0 1:1 1:2 my-RAID0
LSI Corporation SAS2 IR Configuration Utility.
Version 14.00.00.00 (2012.07.04)
Copyright (c) 2009-2012 LSI Corporation. All rights reserved.

SAS2IRCU: Number of drives specified is higher than number of drives
available to create a RAID volume!
SAS2IRCU: Error executing command CREATE.
#
```

sas2ircu コマンドの最初の失敗のあとで、**format** などのその他のディスクユーティリティコマンドによって「drive not available」とマークされたボリュームのディスクメンバーが表示されることがあります。**format** コマンドはハングアップしているように見えることがあり、Ctrl-C キーを押してコマンドを終了させる必要があります。例:

```
# format
Searching for disks...done

AVAILABLE DISK SELECTIONS:
   0. c0t500151795955C40Ed0 <drive not available>
@    /scsi_vhci/disk@g500151795955c40e
    /dev/chassis/unknown.1222BDC067//SYS/SASBP/HDD0/disk
   1. c0t500151795955C19Ed0 <drive not available>
@    /scsi_vhci/disk@g500151795955c19e
    /dev/chassis/unknown.1222BDC067//SYS/SASBP/HDD1/disk
   2. c0t5001517959567D4Dd0 <drive not available>
@    /scsi_vhci/disk@g5001517959567d4d
    /dev/chassis/unknown.1222BDC067//SYS/SASBP/HDD2/disk
Ctrl-C
#
```

回避方法: システムをリブートして、ボリュームを動作状態に復元します。

```
# reboot
```

あるいは、**sas2ircu** コマンドの代わりに、ほかの利用可能な方法の 1 つを使用してボリュームを作成することもできます。

- **raidconfig** コマンドを使用して、Oracle Solaris の下にボリュームを作成します。**raidconfig** コマンドは、Oracle Hardware Management Pack に含まれています。

Oracle Hardware Management Pack ソフトウェアは、次からダウンロードできます。

<http://support.oracle.com>

使用しているバージョンの Oracle Hardware Management Pack のドキュメントを次からダウンロードしてお読みください。

<http://www.oracle.com/goto/OHMP/docs>

- OpenBoot プロンプトで FCode ベースの RAID ユーティリティコマンドを使ってボリュームを作成します。

FCode ベースの RAID ユーティリティコマンドの使用手順については、*SPARC T5 シリーズサーバーの管理ガイド*を参照してください。

rKVMs では SPARC クライアントからのストレージのリダイレクトがサポートされていない (BugID 15795058)

Oracle Solaris システムでの Java Remote Console Plus のストレージ機能の起動がサポートされていません。

回避方法: Java Remote Console Plus のストレージ機能は、Linux または Windows システムで起動してください。サポートされているブラウザ、オペレーティングシステム、およびプラットフォームの完全なリストについては、『*Oracle ILOM 構成および保守用管理者ガイド*』を参照してください。

マウスポインタがリモートウィンドウのカーソルに同調していない (BugID 15798251)

Oracle ILOM ビデオリモートコンソールのマウスポインタが正しく追跡しないことがあります。カーソル位置が Oracle Solaris ホストの Xorg サーバーと同調せず、マウスの移動や選択が困難な状態になる可能性があります。

回避方法:

この手順では永続的な変更を行いませんが、その変更により、マウスの移動が簡単になり、より永続的な変更をもたらす手順を実行できます。

1. GNOME デスクトップでシステムにログインします。

端末ウィンドウの取得時に問題が発生した場合は、次の方法のいずれかを試してください。

- マウスの右ボタンをクリックします。デスクトップのポップアップが表示されたら、**e** と入力します。
- キーボードで Alt-F2 を押して、端末ウィンドウを取得します。次に、**gnome-terminal** と入力します。
- Alt-Tab を押して、目的の端末ウィンドウをアクティブとして選択します。

2. 端末ウィンドウで、次を入力します。

```
xset m 1 1
```

3. 「Oracle ILOM Remote System Console Plus」ウィンドウの左上の隅で、「Mouse Sync」を選択します。

より永続的な修正を行うには、速度、感度、およびしきい値のマウス設定値を最小値に変更します。

1. Gnome デスクトップから、マウスの設定ウィンドウにアクセスします。インストールされている Gnome デスクトップのバージョンに応じて、次のいずれかを選択します。
 - 「システム」>「設定」>「マウス」。
 - 「起動」>「システム」>「設定」>「マウス」。



ヒント

Alt-F2 を押してから「**gnome-mouse-properties**」と入力しても、この場所に到達できます。

2. マウスの設定値を変更します。
 - 「ポインタの速度」の「速度」=「低速」
 - 「ポインタ速度」の「応答性」=「低」
 - 「ドラッグ&ドロップ」の「しきい値」=「小」

キーボードを使用している場合は、目的の項目が強調表示されるまで Tab キーを押して移動します。値ごとに、左矢印キーを押してスライドを左の端まで移動します。

これらの変更は永続的であり、画面ロックやログアウトのあとも持続します。

Oracle Solaris 11 では、別の方法を使用して、問題のあるマウス速度を最初に無効にできます。ただし、この方法で行われた変更は、Xorg セッション中のマウス速度へのその後の変更によってオーバーライドされます。

1. 編集のためにこのファイルを開きます。

```
/etc/hal/fdi/preprobe/10osvendor/10-x11-input.fdi
```

そのファイルのほかのコピーをこのディレクトリ内に残さないようにしてください。

2. 次の行を見つけます。

```
<merge key="input.x11_options.StreamsModule" type="string">usbms</merge>
<merge key="input.x11_options.Protocol" type="string">VUID</merge>
```

3. それらの行のあとに、これらの行を追加して、ファイルを保存します。

```
<merge key="input.x11_options.AccelerationScheme" type="string">none</merge>
<merge key="input.x11_options.AccelerationNumerator" type="string">1</merge>
<merge key="input.x11_options.AccelerationDenominator" type="string">1</merge>
```

```
<merge key="input.x11_options.AccelerationThreshold" type="string">1</merge>
```

4. これらの Oracle Solaris コマンドを入力します。

```
# svcadm restart hal  
# svcadm restart gdm
```

警告メッセージが障害の発生した USB 接続を正しく示していない (BugID 15799824)

Oracle Solaris のブート時に、ごくまれに次のような警告メッセージがホストコンソールに表示されることがあります。

```
WARNING: /pci@300/pci@1/pci@0/pci@4/pci@0/pci@6/usb@0 (xhci0):  
Connecting device on port 2 failed
```

この警告メッセージは、障害情報のやりとりを行うために SP と Oracle Solaris ホストのネットワーク接続を確立する際に使用される USB ネットワークデバイス (usbecm) がうまく接続できなかったことを示しています。

回避方法: ほとんどの場合、警告メッセージが表示された数秒後に USB デバイスは正常に接続します。

USB デバイスが正常に接続したかどうかを確認するには、Oracle Solaris の `/var/adm/messages` ファイルを調べて、後続のメッセージが接続を示しているかどうかを確認めます。

正常な接続を示すメッセージを確認できない場合は、Oracle Solaris ホストをリブートして USB 接続を再度確立します。

リブート後も接続の問題が続く場合は、Oracle 承認サービスプロバイダにお問い合わせください。

kmdb が failed to allocate XXX bytes を報告することがある (BugID 15806455)

ごくまれに、カーネルモジュールデバッガ (**kmdb**) を使用して稼働中のシステム状態を調べるときに、**kmdb dcmds** が失敗し、次のエラーが表示されることがあります。

```
kmdb: failed to allocate XXX bytes -- recovering.
```

影響を受けた **kmdb** コマンドには、**::cpuinfo** および **::stacks** が含まれています。

エラー状態が報告されたあとも **kmdb** の使用を続けると、機能が低下することがあり、他の組み込み **dcmds** または **walker** も続いて失敗する可能性があります。

kmdb はメモリー不足の状態から正常に修復しようとしませんが、**kmdb** が修復せず、強制終了させるをえないことがあります。この場合は、システムを手動で修復する必要があります。

回避方法: 可能であれば、アクティブなデバッグに **kmdb** を使用しないでください。**kmdb** を使用する必要がある場合は、Oracle サービスプロバイダにお問い合わせください。

USB ポートでブート中に xhci デバイスが失敗する (BugID 15809582)

前面または背面の USB ポートの 1 つに USB 3.0 デバイスを取り付けて Oracle Solaris OS をブートすると、次のメッセージが表示されることがあります。

```
WARNING /pci@300/pci@1/pci@0/pci@4/pci@0/pci@6/usb@0
(xhci0): Connecting device on port 7 failed
```

回避方法: このメッセージは無視しても問題ありません。

/System/Cooling のターゲットに電源装置ファンが未サポートとして表示される (BugID 15809846)

この Oracle ILOM コマンドの入力時:

```
-> show /System/Cooling
```

「Properties」の下の出力には、次の行が含まれます。

```
installed_power_supply_fans = Not Supported
max_power_supply_fans = Not Supported
```

回避方法: 次のコマンドを入力して、取り付けられている電源装置ファンに関する正確な情報を表示します。

```
-> show /SYS -l all type==?Fan? value
```

libldom/ldom_xmpp_client.c 内でファイル記述子が漏えいしている (BugID 15811297)

論理ドメインマネージャー (ldmd) がしばらく停止すると、Oracle Solaris の予測的自己修復 (PSH) 障害管理デーモン (fmd) が動作しなくなる可能性があります。SPARC T5 シリーズサーバーでは、I/O 障害 (ディスク障害など) は Oracle Solaris の fmd によって診断されます。その他の障害は、SP の Oracle ILOM によって診断され、このバグの影響は受けません。

修正を含むパッチが入手可能になったら、すぐにそのパッチをインストールするようにしてください。10 ページの「[パッチを取得する](#)」を参照してください。

回避方法: I/O 障害が報告されていないと推測される場合は、これらの手順を実行します。

1. ldmd がオンラインかどうかを確認します。

ldmd がオンラインの場合、このバグは問題ではありません。サービスマニュアルに記載されている障害管理手順を参照してください。

ldmd がオフラインの場合は、手順 2 に進みます。

2. ldmd を再起動します。
3. fmd を再起動します。

I/O 障害が発生していた可能性があります、その障害は PSH によって診断されませんでした。サービスマニュアルの記述に従って、システムログを確認して問題を特定してください。

ilomconfig が Internal Error を報告することがある (BugID 15823485)

OS と SP の間の通信チャンネルを有効にする Oracle Solaris の **ilomconfig** コマンドが、**Internal Error** メッセージを表示して失敗することがときどきあります。

この通信チャンネルはデフォルトで有効になっており、操作の通常の過程で無効になることは普通はありません。ただし、スーパーユーザーがこの Oracle Solaris コマンドを使用すれば、そのチャンネルを無効にできます。

```
# ilomconfig disable interconnect
Host-to-ILOM interconnect disabled.
```

その相互接続を有効にするためのコマンドが、このエラーメッセージを表示して再度失敗することがときどきあります。

```
# ilomconfig enable interconnect
ERROR: Internal error
```

この状況が発生した場合は、回避方法に従ってリンクを再度有効にします。これは、そのリンクが Oracle Solaris インスタンスと SP の間の診断データの転送に使用されていて、すぐに有効にし直す必要があるためです。

回避方法: コマンドを再入力して相互接続を有効にします。

```
# ilomconfig enable interconnect
Host-to-ILOM interconnect successfully configured.
```

障害が続く場合は、Oracle 承認サービスプロバイダにお問い合わせください。

fault.sunos.eft.unexpected_telemetry 障害が断続的に発生する (BugID 15820471)

多数の訂正可能なエラーを報告するデバイスは、無効にされている間もエラーを報告し続けます。各エラーはキューに入れられ、順番に診断されます。まれに、デバイスによって報告された最後のエラーがキューに入れられたあと、そのデバイスが無効になるまで診断の処理が行われないことがあります。この最後のエラーが予期しないテレメトリとして報告されるのは、デバイスがそのシステムで有効でなくなっているからです。

例:

```
# fmadm faulty
-----
-----
Time          UUID                               msgid
Severity
-----
Problem Status : solved
-----
-----
```

```

FRU
  Status      : faulty
  Location    : -
  Chassis
    Manufacturer : Oracle Corporation
    Name         : T5-4
    Part_Number  : xxxxxxxx
    Serial_Number : xxxxxxxxxxxx
Suspect 1 of 2
Diag Engine   : [unknown]
2012-10-04/17:24:07 87732365-faa6-e9cd-bf2a-9052cb8cf876 SUNOS-8000-J0
Major
-----
Suspect 2 of 2
  Fault class : defect.sunos.eft.unexpected_telemetry
  Certainty   : 50%
  Affects     : dev:///pci@1040/pci@1/pci@0
  Status      : faulted but still in service
Fault class  : fault.sunos.eft.unexpected_telemetry
System
FRU
Certainty    : 50%
Manufacturer  : Oracle Corporation
Status       : faulty
Description: A fault has been diagnosed by the Host Operating System.
Response     : The service required LED on the chassis and on the affected
              FRU may be illuminated.
Impact       : No SP impact.
Action       : Refer to the associated reference document at
              http://support.oracle.com/msg/SUNOS-8000-J0 for the latest
              service procedures and policies regarding this diagnosis.
Affects      : dev:///pci@1040/pci@1/pci@0
Name         : T5-4
Location     : -
Status       : faulted but still in service
Part_Number  : xxxxxxxx
Chassis
Serial_Number : xxxxxxxxxxxx
Manufacturer  : Oracle Corporation
Name         : M4-32
Part_Number  : xxxxxxxx
Serial_Number : xxxxxxxxxxxx

```

この場合は、その予期しないテレメトリ障害を無視できます。

回避方法:

1. **fmadm faulty** コマンドを使用して障害の UUID を取得します。

```

# fmadm faulty
-----
-----
Time          UUID                               msgid
...
Severity
-----
-----

```

```
2012-10-04/17:24:07 87732365-faa6-e9cd-bf2a-9052cb8cf876 SUNOS-8000-J0
Major
```

2. 予期しないテレメトリ障害を、その UUID を使用して Oracle Solaris ホストから消去します。

```
# fmadm repair 87732365-faa6-e9cd-bf2a-9052cb8cf876
```

高速の PCIe I/O カードがときどき Gen1 I/O の速度まで低下する (BugID 15825866)

非常にまれですが、5.0GT/秒以上のデータ転送速度に対応している一部の PCIe オプションカードが、サポートされている最高のターゲット速度で処理できないことがあります。代わりに、それらは 2.5GT/秒の最低速度でトレーニングを行い、それによって I/O パフォーマンスが低下する可能性があります。

回避方法:

1. I/O パフォーマンス不足の疑いがある場合は、**prtdiag** コマンドを使用して、PCIe カードの I/O パフォーマンスを表示します。

「Speed」という見出しの下に、スロットごとの現在のリンクのデータ転送速度が表示されます。

```
# prtdiag
System Configuration: Oracle Corporation sun4v
Memory size: 523008 Megabytes
...
===== IO Devices =====
Slot +          Bus  Name +          Model          Speed
-----
Status          Type  Path
/SYS/MB/USB_CTLR PCIE  usb-pciexclass,0c0330          5.0GTx1
/SYS/RCSA/PCIE4  PCIE  SUNW,qlc-pciex1077,2532      QLE2562      5.0GTx4
/SYS/RI0/NET1    PCIE  network-pciex8086,1528      5.0GTx8
/pci@300/pci@1/pci@0/pci@4/pci@0/pci@6/usb@0
/pci@440/pci@1/pci@0/pci@c/SUNW,qlc@0
/SYS/RCSA/PCIE10 PCIE  SUNW,qlc-pciex1077,2532      QLE2562      5.0GTx4
                /pci@480/pci@1/pci@0/pci@4/SUNW,qlc@0
/SYS/RCSA/PCIE10 PCIE  SUNW,qlc-pciex1077,2532      QLE2562      5.0GTx4
                /pci@480/pci@1/pci@0/pci@4/SUNW,qlc@0,1
/pci@300/pci@1/pci@0/pci@4/pci@0/pci@8/network@0,1
/SYS/RI0/NET0    PCIE  network-pciex8086,1528      5.0GTx8
/SYS/RCSA/PCIE4  PCIE  SUNW,qlc-pciex1077,2532      QLE2562      5.0GTx4
/SYS/RCSA/PCIE6  PCIE  SUNW,qlc-pciex1077,2532      QLE2562      5.0GTx4
                /pci@600/pci@1/pci@0/pci@8/SUNW,qlc@0
/SYS/RCSA/PCIE6  PCIE  SUNW,qlc-pciex1077,2532      QLE2562      5.0GTx4
```

```

                /pci@600/pci@1/pci@0/pci@8/SUNW,qlc@0,1
/SYS/RCSA/PCIE2  PCIE  SUNW,qlc-pciex1077,2532          QLE2562      5.0GTx4
/pci@300/pci@1/pci@0/pci@4/pci@0/pci@8/network@0
/pci@440/pci@1/pci@0/pci@c/SUNW,qlc@0,1
/SYS/RCSA/PCIE8  PCIE  SUNW,qlc-pciex1077,2532          QLE2562      5.0GTx4
                /pci@640/pci@1/pci@0/pci@8/SUNW,qlc@0
/SYS/RCSA/PCIE8  PCIE  SUNW,qlc-pciex1077,2532          QLE2562      5.0GTx4
                /pci@640/pci@1/pci@0/pci@8/SUNW,qlc@0,1
/pci@400/pci@1/pci@0/pci@c/SUNW,qlc@0
/SYS/RI0/NET2    PCIE  network-pciex8086,1528                5.0GTx8
/SYS/RCSA/PCIE2  PCIE  SUNW,qlc-pciex1077,2532          QLE2562      5.0GTx4
/pci@6c0/pci@1/pci@0/pci@c/pci@0/pci@4/network@0
/pci@400/pci@1/pci@0/pci@c/SUNW,qlc@0,1
/SYS/RI0/USB_CTLR PCIE  usb-pciexclass,0c0330                5.0GTx1
/SYS/RI0/NET3    PCIE  network-pciex8086,1528                5.0GTx8
/pci@6c0/pci@1/pci@0/pci@c/pci@0/pci@6/usb@0
/pci@6c0/pci@1/pci@0/pci@c/pci@0/pci@4/network@0,1
/SYS/RI0/VIDEO0  PCIE  display-pciex102b,522                2.5GTx1
/pci@6c0/pci@1/pci@0/pci@c/pci@0/pci@7/display@0
/SYS/MB/SASHBA1  PCIE  scsi-pciex1000,87                    LSI,2308_2   5.0GTx8
/pci@6c0/pci@1/pci@0/pci@c/pci@0/pci@c/scsi@0

```

特定のオプションカードのターゲット転送速度を調べるには、それぞれのドキュメントを参照してください。

- PCIe カードがシステムでサポートされている最高のターゲット速度に適合しない場合は、『SPARC T5-4 サービスマニュアル』に説明されているように、ホットサービス可能な方法で PCIe カードを取り外して、再度取り付けます。



注記

PCIe カードを物理的に取り外して取り付ける必要はありません。

アクティブな mempm はノード全体にわたってケージ割り当てのバランスを取るべきである (Bug ID15944881)

大規模な SPARC T5 シリーズサーバーのドメインでは、特定のワークロードが予想外のパフォーマンス低下や負のパフォーマンススケールを示すことがあります。また、多数のネットワークアダプタを搭載した大規模な SPARC T5 サーバーでは、集合ネットワークのスループットがわずかに 12G バイト/秒以下に制限されることがあります。

Oracle Solaris のカーネルは、そのデータ構造体をケージ(カーネルメモリーの上限を定義するもの)の内側で管理します。このケージは、必要であれば、時間の経過に伴って拡張することが可能です。カーネルがいずれか 1 つの近傍性グループ (*lgrp*) 内でメモリーを使い果たすことがないように、ケージはドメイン内のメモリー全体にわたって分散されるのが理想的です。*lgrp* 全体にわたってケージを分散するのが望ましいのは、ローカルメモリーが使用可能であれば、*lgrp* 内のプロ

セッサで動作しているユーザーレベルのコードが、別の lgrp 内のリモートメモリーを使用しているものよりも、パフォーマンス面で優れているからです。

回避方法: チューニング可能な mempm パラメータは、カーネルがケージの増大と分散をどのように管理するかを定義しています。ほとんどのワークロードでは、mempm パラメータをそのデフォルト値 (0) のままにしておき、電力管理コードがケージの割り当てに影響を及ぼすようにすることができます。ただし、ワークロードによっては、電力対応でない従来のケージ割り当てアルゴリズムを使用したほうが、カーネルメモリーがより均等に分散される場合もあります。

多数の CPU が存在する大規模ドメインで、予期しない低パフォーマンスまたは負の単位がアプリケーションレベルで観察される場合は、mempm パラメータを設定します。mempm パラメータを 1 に設定すると、電源管理システムのケージ割り当てアルゴリズムが無効になり、カーネルが従来のケージ割り当てアルゴリズムに戻ります。

mempm パラメータを設定するには:

1. /etc/system ファイルに次を追加します。

```
set plat_disable_mempm=1
```

2. サーバーをリブートし、(lgrpinfo ツールを使用するなどして) メモリーのバランスが lgrp 全体にわたってより適切に取れているかどうかを調べます。



注記

この問題が続く場合は、Oracle サービスプロバイダにお問い合わせください。

HC からの再構成呼び出しのあとに POST が機能しない (BugID 15968276)

POST がブートシーケンスの一環として実行され、システムがハードウェア障害を検出すると、POST の ERROR メッセージ (そのあとに INFO メッセージが続く) が表示されることがあります。ブートシーケンスは続行しますが、システムには未検査のハードウェアが含まれる可能性があります。未検査のハードウェアは、ブート後にオペレーティングシステムで利用できるようになります。

このような場合、POST は数分間ストールしてから、次の例にあるようなエラーレポートを送信します。

```
2013-01-23 15:30:55:990 0:0:0>ERROR:
  ereport.chassis.post.io.test-fail@/SYS/MB/CM0/CMP/PCIE_LINK1
  reporting PCPU ID=0
  TestTitle=IO Trap Handler
  Operation=Data Access Error (Type: 32)
  Trap PC=0x0000000000560b8c
  Trap Level=0x01
  NPESR=0x0000000000000001
  NPEAR=0x0000805100700000
END_ERROR

2013-01-23 15:30:56:054 0:0:0>INFO: Link Down Recovery Not
Supported
```

```
2013-01-23 15:31:02 0:0:0> ERROR: POST Timed out. Not all
components tested
```

回避方法 A: `fmdump -eV` コマンドを使用して、エラーログとコンソールメッセージを確認します。障害のあるハードウェアがあれば、交換または修理します。

回避方法 B: POST を再起動します。POST は、障害のあるコンポーネントがすでに構成解除されているシステムでは動作します。

Link error on port 3 警告 (BugID 16038894)

USB デバイスが内蔵の USB ポートソケットに取り付けられているサーバーの電源投入時に、この警告メッセージが表示されることがあります。

```
WARNING: /pci@340/pci@1/pci@0/pci@2/usb@0: Link error on port 3,
resetting.
```

回避方法: この警告メッセージは無視しても問題ありません。デバイスは完全に機能しているはずですが、デバイスが機能していない場合は、Oracle サポートにお問い合わせください。

ドライブを構成解除したときに、ドライブの取り外し OK LED が点灯しないことがある (BugID 16051551)

この問題は、Oracle Solaris 10 1/13 OS が動作しているサーバーにのみ該当します。

`cfgadm(1M)` コマンドを使用してドライブを構成解除した場合に、そのドライブの青色の取り外し OK LED が点灯しないことがあります。この問題により、ドライブが取り外し可能であることを確認したり、ドライブの物理的な位置を特定したりするのが難しくなります。

回避方法: これらの手順を実行して、ドライブが取り外し可能であることを確認したり、ドライブの物理スロットを特定したりします。

1. `cfgadm` コマンドを使用して、構成解除を予定しているドライブの WWID を特定します。

この例では、5 番目のドライブが構成解除されます。5 番目のドライブの WWID は `w500c50033278c09,0` です。

```
# cfgadm -al |
grep disk
c7: :w500cca016065039,0      disk-path    connected    configured
  unknown
c8: :w500cca0257b4999,0      disk-path    connected    configured
  unknown
c9: :w500cca0257ca335,0      disk-path    connected    configured
  unknown
c10: :w500cca03c252999,0     disk-path    connected    configured
  unknown
c13: :w500c50033278c09,0     disk-path    connected    configured
  unknown
```

2. ドライブを構成解除します。

```
# cfgadm -c unconfigure c13::w5000c50033278c09,0
```

3. ドライブが構成解除されていることを確認します。

```
# cfgadm -al |
grep disk
c7::w5000cca016065039,0      disk-path    connected    configured
unknown
c8::w5000cca0257b4999,0      disk-path    connected    configured
unknown
c9::w5000cca0257ca335,0      disk-path    connected    configured
unknown
c10::w5000cca03c252999,0     disk-path    connected    configured
unknown
c13::w5000c50033278c09,0     disk-path    connected    unconfigured
unknown <<==
```

ドライブの取り外し OK LED が点灯しない場合は、残りの手順を実行します。

4. `prtconf -v` コマンドの出力をファイルに送信します。

```
# prtconf -v > /tmp/prtconf.out
```

5. エディタを使ってそのファイルを開き、構成解除されたドライブの WWID (この手順の例では **5000c50033278c09**) を検索します。
6. その出力で、ドライブの位置とそのドライブがオフラインであることを確認します。

ドライブの位置を特定するには、WWID の 2 行上を確認します (この例では HDD4)

WWID を含む行のあとの行を確認します。「**offline**」という語は、そのドライブが構成解除されていることを示します。

```
disk, instance #13 (driver not attached)
  System software properties:
    name='ddi-devid-registrant' type=int items=1
    value=00000001
  Hardware properties:
    name='class' type=string items=1
    value='scsi'
    name='inquiry-revision-id' type=string items=1
    value='0B70'
    name='inquiry-product-id' type=string items=1
    value='ST930003SSUN300G'
    name='inquiry-vendor-id' type=string items=1
```

```

        value='SEAGATE'
        name='inquiry-device-type' type=int items=1
        value=00000000
        name='compatible' type=string items=4

value='scsiclass,00.vSEAGATE.pST930003SSUN300G.r0B70' +
'scsiclass,00.vSEAGATE.pST930003SSUN300G' + 'scsiclass,00' +
'scsiclass'
        name='client-guid' type=string items=1
        value='5000c50033278c0b'
location: /dev/chassis/SPARC_T5-2.1144BD5ZZZ//SYS/SASBP/HDD4/disk <==
Location
        Paths from multipath bus adapters:
        Path 5:
        /pci@3c0/pci@1/pci@0/pci@2/scsi@0/iport@1/disk@w5000c50033278c09,0
        mpt_sas#7 (offline) <==
Driver offline means drive is unconfigured.
        name='wwn' type=string items=1
        value='5000c50033278c0b'
        name='lun' type=int items=1
        value=00000000
        name='lun64' type=int64 items=1
        value=000000000000000000
        name='target-port' type=string items=1
        value='w5000c50033278c09'
        name='attached-port' type=string items=1
        value='w508002000147f5b1'
        name='attached-port-pm' type=string items=1
        value='1'
        name='target-port-pm' type=string items=1
        value='1'
        name='phy-num' type=int items=1
        value=00000000
        name='obp-path' type=string items=1
        value=
'/pci@3c0/pci@1/pci@0/pci@2/scsi@0/disk@w5000c50033278c09,0'

```

FPGA iPOST の power-on-reset、error-reset、および hw-change トリガーが機能しない (BugID 16192025)

SP 上の Oracle ILOM ソフトウェア内から、SP のブートシーケンス中に FPGA iPOST (Oracle ILOM POST) がいつ実行されるかの制御が次のプロパティによって管理されます。

- /SP/diag mode
- /SP/diag trigger

デフォルトでは、これらのプロパティは FPGA iPOST の実行が無効になるように定義されています。例:

```
...
/SP/diag mode=off
/SP/diag trigger=all-resets
...
```

/SP/diag mode を normal に変更して iPOST を有効にした場合に、さらに /SP/diag trigger を all-resets からその他の値 (power-on-reset、error-reset、または hw-change) に変更した場合、iPOST は実行されません。さらに、ブートシーケンス中に次のメッセージが SER MGT ポート上に表示されて、iPOST が実行されなかったことが示されます。

```
...
Starting IPMI Stack: . Done
Starting BBR daemon...
bbrd started after 0 seconds.
Starting SP fishwrap cache daemon: fishwrapd . Done
FPGA iPOST skipped
Starting Host daemon: hostd . Done
Starting Network Controller Sideband Interface Daemon: ncsid . Done
Starting Physical Domain Manager: pdm . Done
Starting Platform Obfuscation Daemon: pod . Done
Starting vbsc daemon: vbsc . Done
...
```

回避方法 A: SP のブート時に iPOST を実行させるには、それが有効になっているときに、trigger プロパティが all-resets に設定されているようにします。

1. ホストが動作していない状態で、SP にログインします。
2. /SP/diag trigger を all-resets に設定します。
 - a. Oracle ILOM CLI で、次を入力します。

```
-> set /SP/diag trigger=all-resets
```

- b. Oracle ILOM BUI で、「System Management」を左クリックしてから、左側のペインの「Diagnostics」エントリを左クリックします。次に、右側のペインでラベル付きの trigger の下にある 3 つのボックスをすべて選択します。
3. SP をリブートします。

次の出力がシステムコンソールに表示されるはずです。

```
...
Starting IPMI Stack: . Done
Starting BBR daemon...
bbrd started after 0 seconds.
Starting SP fishwrap cache daemon: fishwrapd . Done
Running FPGA iPOST
Starting Host daemon: hostd . Done
```

```
Starting Network Controller Sideband Interface Daemon: ncsid . Done
Starting Physical Domain Manager: pdm . Done
Starting Platform Obfuscation Daemon: pod . Done
Starting vbsc daemon: vbsc . Done
...
```

複数の LDOM 構成ファイルが同じ名前を使って存在する場合に Oracle ILOM エラーが発生することがある (BugID 16239544)

複数の ldmd 構成ファイルをさまざまな名前で持つことができます。それらの名前は大文字と小文字の区別がある (たとえば、Alpha と alpha は異なる名前) ため、同じ単語を使用する構成ファイルが許可されています。Oracle ILOM の UI 名では、大文字と小文字の区別はありませんが、大文字と小文字の区別が保存されます。そのため、Alpha と alpha などの複数の構成ファイル名によって Oracle ILOM の UI でエラーが発生することがあります。

たとえば、次のコマンドを入力した場合、同じファイル名を使用する複数の構成ファイルが存在すると、その UI はハングアップします。

```
-> show /HOSTx/domain/configs
```

回避方法: 大文字と小文字が一致する ldmd 構成ファイルの 1 つを削除します。そして、Oracle ILOM インフラストラクチャーが UI プロセスを自動再起動するまで待ちます。

CPU の電力管理によってディスクの IOPS パフォーマンスが低下する可能性がある (BugID 16355418)

短期間に非常に多くの I/O 操作の実行を試みる I/O 集中型のワークロードは、無負荷時のシステムであっても、I/O パフォーマンスの低下を招く可能性があります。ただし、実行する負荷の大きな I/O 操作の数が少なければ、この問題の影響を受けません。

回避方法: 影響を受けた 1 つまたは複数のドメイン内で次のコマンドを入力します。

```
# poweradm set administrative-authority=none
```

この問題が続く場合は、Oracle サービスプロバイダにお問い合わせください。

SR-IOV デバイスの使用中に、リソースのバインド解除または削除の試みがハングアップし、Ctrl-C キーで停止できない (BugID 16426940)

SR-IOV 構成を持つ SPARC T5 または SPARC M5 システムでは、Ctrl-c コマンドで停止できないハングアップが生じることがあります。このハングアップは、ldm unbind または ldm rm-io コマンドの使用時にまれに発生することがあります。

回避方法: プライマリドメインで動作している Oracle Solaris OS のインスタンスをリブートします。また、I/O リソースをプライマリドメインと共有しているゲストドメインもすべてリブートします。

Oracle ILOM が V1 権限を送信するが、Oracle Solaris が V1 権限を処理できない (BugID 16456603)

SPARC T5 シリーズサーバーは、Oracle Solaris OS 内で SP (Oracle ILOM) 障害を表示する機能を導入しています。ただし、影響を受けた FRU、FRU の場所、プラットフォームのシリアル番

号といった一部の情報フィールドは Oracle Solaris 10 OS によって正しく解釈されません。この問題は Oracle Solaris 11 OS には影響しません。

以前のリリースのプラットフォームと同様に、重大な障害が SP で検出されると、シャーシの障害 LED が点灯して、SP のステータスを調べる必要があることが示されます。

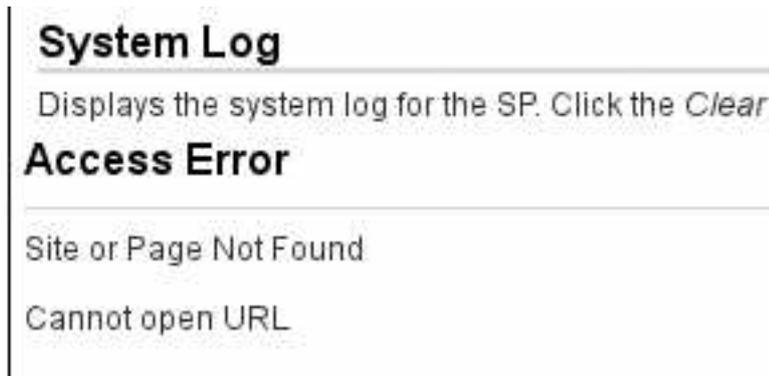
回避方法: 不明な情報や不完全な情報を含むプロキシ障害が発生した場合は、必要な情報を SP から収集します。

SP の管理で予想どおりにテーブルが表示されない (BugID 16607793)

Oracle ILOM Web インタフェースを使用して SP を管理している場合は、「System Log」をクリックすると、システムログがテーブルに表示されます。テーブルの一番下にあるボタンを使用すると、システムログのページをめくったり、システムログのすべてのページを単一のページとして表示したりできます。



しかし、これらのボタンのいずれか 1 つをクリックすると、Web インタフェースによって次のエラーメッセージが表示されます。



「System Log」をクリックして、システムログを再度表示します。

回避方法 1: 表示される行数を最大の 999 に設定します。これにより、Web インタフェースにある最新のシステムログエントリを 999 個まで表示できます。



注記

この制限より古いエントリは、Web インタフェースに表示できません。999 個よりも古いログエントリを表示するには、後述の回避方法 2 を参照してください。

1. 「System Log」ページでこのアイコンをクリックします。



「Table Preferences」ペインが開きます。

2. 「Rows Per Page」値を 999 に設定します。

3. 「OK」をクリックします。

システムログテーブルが最長の 999 行まで再表示されます。

回避方法 2: ページ区切りを使ってシステムログを表示します。この回避方法により、最新の 999 個よりも古いログエントリを表示できます。

1. Oracle ILOM CLI インタフェースで、システムログを表示します。

```
-> show /System/Log/list/
Log
ID      Date/Time                Event Type
Subsystem
-----
-----
211     Tue Apr  9 07:12:13 2013  Disk
Removed                               Storage
Component:HDD2 (Disk 2)
Disk Removed at location HDD2 (Disk 2)
210     Tue Apr  9 07:11:42 2013  Disk
Removed                               Storage
Component:HDD1 (Disk 1)
Disk Removed at location HDD1 (Disk 1)
.
.
.
Paused: press any key to continue, or 'q' to quit
```



注記

出力の幅とページごとに表示されるログエントリの数は、コマンド入力時の端末ウィンドウのジオメトリによって決まります。

2. システムログの次ページを表示するにはスペースバーを押し、出力を停止するには Q キーを押します。

初回ブート中の一部のインスタンスで、Oracle Solaris OS のドライバによるドライブコントローラへの接続の試みが早すぎたためにドライブ接続エラーが発生する (Bug ID16608475)

一部のインスタンスで、Oracle Solaris OS のドライバが接続を試みるときにドライブコントローラの準備ができていないことがあります。この問題がブートドライブを処理するドライブコントローラに影響する場合は、次の OBP メッセージがホストコンソールに表示されます。

```
failed in wait-for-doorbell
send-message / issue-ioc-facts failed
```

```
issue-ioc-facts failed
Can't open adapter
ok>
```

この問題がブートドライブを処理しないドライブコントローラに影響する場合は、次のメッセージがホストコンソールと `/var/adm/messages` ログ内に表示されます。

```
Probing for device nodes ...
@ WARNING: /pci@3c0/pci@1/pci@0/pci@2/scsi@0 (mpt_sas1):
  mptsas_ioc_get_facts failed
@ WARNING: /pci@3c0/pci@1/pci@0/pci@2/scsi@0 (mpt_sas1):
  mptsas chip initialization failed
@ WARNING: /pci@3c0/pci@1/pci@0/pci@2/scsi@0 (mpt_sas1):
  attach failed
```

回避方法 1:

ブートドライブを処理するコントローラが接続に失敗した場合は、次を実行します。

1. SP にログインして、`auto-boot` パラメータを無効にします。

```
-> set /HOST/bootmode script="setenv auto-boot? false"
```

2. システム内のドライブをプローブします。

ok>プロンプトで、次を入力します。

```
ok> probe-scsi-all
```

3. ドライブがすべて接続されていることを確認します。
4. サーバーをブートします。

回避方法 2:

システムはブートするが、ドライバが 2 つめのディスクコントローラを接続しない場合は、次を入力します。

```
# devfsadm -C
```

ドライブがすべて接続されていることを確認します。

ドキュメントに関する問題点

これらのトピックでは、製品ドキュメントの既知の問題について説明します。

- [31 ページの「プロセッサモジュールのベゼルの図が正しくない」](#)
- [31 ページの「プロセッサモジュールの保守ラベルに正しくない DIMM 構成が示されている」](#)
- [31 ページの「プロセッサモジュールの保守ラベルに正しくないプロセッサモジュール構成が示されている」](#)

- ・ 31 ページの「プロセッサモジュールの保守ラベルにフィルターパネルのサポートが示されている」

プロセッサモジュールのベゼルの図が正しくない

フロントパネルのベゼルの図に、プロセッサモジュールがホットサービスコンポーネントとして描かれています。しかし、プロセッサモジュールはコールドサービスにのみ対応しています。プロセッサモジュールを保守する前にサーバーの電源を切る必要があります。

プロセッサモジュールの保守ラベルに正しくない DIMM 構成が示されている

プロセッサモジュールの保守ラベルに、半数構成の DIMM がサポートされていることが示されています。しかし、フル構成のプロセッサモジュールしかサポートされていません。

プロセッサモジュールの保守ラベルに正しくないプロセッサモジュール構成が示されている

プロセッサモジュールの保守ラベルに、サーバーがシングルプロセッサまたはデュアルプロセッサモジュール構成をサポートしていることが示されています。しかし、デュアルプロセッサモジュール構成しかサポートされていません。

プロセッサモジュールの保守ラベルにフィルターパネルのサポートが示されている

プロセッサモジュールの保守ラベルに、DIMM およびプロセッサモジュールのフィルターパネルがサポートされていることが示されています。しかし、これらのコンポーネントはサポートされていません。

